

研究代表者 所属・職：健康科学部・准教授

氏 名：坂口 大史

研究課題名：フィンランドの保育施設におけるインテリア調査と内装木質化による施設環境の向上

研究の概要

本研究はフィンランドの保育施設におけるインテリア調査に基づき、マテリアルや空間構成を分析することで、日本における保育施設の環境改善に関する資する知見を得ることを目的とした研究である。特に、保育室空間の内装木質化を通じた室内環境の快適性の向上を意図している。

日本における保育施設の多くは、最低限の設えや人工材料を中心とした内装仕上げなど、室内環境が充実しているとはいえない。一方フィンランドでは木材を内装に用いた施設が多くみられる。特に利用者が多くの時間を過ごす活動の中心的なスペースで保育施設における内装木質化は、室内環境整備の効果が大きいといえる。また、室内環境向上の手法として、温かみやリラックス効果に加えて、調湿作用や防菌効果など心理・情緒・健康面での様々な効果をもつ木材を活用することは有効であるといえる。さらに、本研究を行うことで、国土の多くを森林が占めているにも関わらず、木材供給量の約7割を輸入木材が占めており活用されていない、豊富な森林資源の具体的な有効利用策にも繋がる。

達成状況・成果内容

本調査により、フィンランドの保育施設は質の高い幼児教育と、多様なニーズに応じた柔軟な保育環境を提供していることが明らかとなった。教育面では、国家幼児教育カリキュラム（VASU）に基づいたプログラムにより、子どもの探究心や創造性を育む教育が行われている。特にレッジョ・エミリア教育の影響を受けた施設では、子ども一人ひとりに応じた個別対応や、プロジェクト型学習・共同作業が重視されていた。また、保育士の配置基準も厳格で、教育とケアの質の高さが維持されている。

環境面では、自然環境を活用した屋外活動が通年で推奨されており、子どもたちは遊びや探索を通じて体力を養い、自然との関わりを深めていた。施設には屋外遊具が整備され、子どもたちが自由に活動できる環境が整っている。建築設計においても、木材やCLT（直交集成板）を活用し、持続可能性やエネルギー効率に配慮した設計がなされていた。木材を現しで用いた内装や、バリアフリー設計、柔軟な空間構成により、快適で安全な保育環境が提供されていた。また、室内の快適性にも配慮されており、エネルギー効率の高い空調や換気システムが導入されているほか、木材を使用した家具や遊具によって自然を身近に感じられる空間がつけられていた。これらは子どもの情緒的発達や環境意識の醸成にも寄与している。

一方で、都市部での定員不足や保育士確保の困難、多文化化への対応といった課題も浮き彫りとなった。多言語保育の体制強化が今後の課題である。以上を踏まえ、日本の保育施設でも、子どもの自主性を尊重する教育や持続可能な建築技術、屋外活動の充実といった点から改善の可能性が示唆され、今後の保育環境の充実に向けた重要な示唆が得られた。